

世界哲学と仏教—中世日本仏教の視座から—

頼住光子（東京大学）

近年、日本の哲学研究の世界では、「世界哲学」が無視できないトレンドとなっている。グローバル化を背景として、従来の哲学が、あまりにも西洋中心であり、哲学史というとギリシア以来のヨーロッパの哲学史となってしまっている現状を見直し、世界の他の地域でこれまで積み上げられて来た知的営為をも「哲学」と捉えて、そこに目を向けていこうという動きが加速しているのである。

私自身、中世日本仏教研究を中心とする自分の研究分野について、これまで、「日本思想史」として把握しており、「日本哲学」というのは西洋哲学を受容した、明治以降の哲学（その代表例が京都学派）であると漠然と考えていた。

しかし、「世界哲学」という把握の仕方を考慮した時、中世日本仏教もまた一つの「世界哲学」、つまり、日本という固有の場において、世界や人間の普遍的な在り方について、筋道立った思索を展開した営為であったとすることができる。

提題においては、道元を中心として、中世日本における「世界哲学」の具体的なありようについて説明をしたい。